

# 鹿児島県の高齢化を支える地域の取組と学校 — 地域と学校をつなぐ家庭科教師の役割 —

八幡(谷口)彩子\*・上大川 唯\*\*

School and local efforts supporting the aging society in Kagoshima Prefecture:  
The role of home economics teachers in connecting schools to the local community

Ayako YAHATA-TANIGUCHI and Yui KAMIOKAWA

(Received October 26, 2023)

## Abstract

As Japanese society ages, learning about the aging process and the elderly in junior high school home economics is given more and more importance.

In this paper, we consider the issues of local aging and nursing care in the future, with a focus on nursing care day and its relationship with school-community partnership in Kagoshima.

For this purpose, we researched events at nursing homes as well as school-community partnership projects in Kagoshima Prefecture and Ibusuki City. As part of this process, we interviewed Mr. Takehiro Kariya, Yoshimoto comedian, and a visiting lesson lecturer at a Kagoshima nursing home.

Our results were as follows: 1) the image of the elderly and nursing care was altered by visiting lessons by this comedian. The students laughed a lot when had a comedian as a guest in home economics class. 2) Home economics teachers are expected to play a role as community coordinators, connecting schools to the community, in order to share any problems at school with the community, and further to enrich the content of home economics lessons. Home economics teachers who understand community characteristics and conditions can be expected to help expand on various connections between teachers of other subjects or home economics teachers.

**Key words** : Kagoshima Prefecture, home economics teacher's roles, local efforts supporting the aging society, community school, school-community partnership project

## 1. 研究目的

わが国における高齢化の進展と介護職員不足を背景に、高等学校家庭科で学んでいた高齢者や介護に関する学習内容の一部が、小学校家庭科や中学校技術・家庭科(家庭分野)の内容「A 家族・家庭生活」で扱われるようになるなど、高齢者に関する題材が重視されてきている。地域の特性をふまえ、地域と連携して高齢者の介護に関心や親しみを持てる家庭科の授業作りを行うことは喫緊の課題である。

本稿で取り上げる鹿児島県は、全国的に最も高齢化が進む地域の一つである。本研究では、鹿児島県で実施されている「介護の日」関連イベント、「かごしま地域学校協働活動」に着目し、これからの地域や学校における高齢者や介護に関する学び方について検討する。子どもたちが地域に親しみを持ち、介護への理解が深められるような笑いあふれる家庭科の授業提案をめざしたい。

## 2. 研究方法

本研究では、以下のような聞き取り調査を通して、鹿児島における高齢者の学習に関する家庭科の授業

\* 熊本大学大学院教育学研究科

\*\* 学校法人 KTC 学園屋久島おおぞら高等学校

作りに求められる視点を検討する。

- 1) 鹿児島県における「介護の日」の取組について、①「介護の日」関連イベントを主催する鹿児島県くらし保健福祉部高齢者生き生き推進課ならびに②「介護の日」関連イベントで、訪問授業を行っている仮屋竹洋氏に対する聞き取り調査を実施する。
- 2) 「かごしま地域学校協働活動」の取組について、①「かごしま地域学校協働活動」を推進している鹿児島県教育庁社会教育課ならびに②「いぶすき地域学校協働活動」を推進している指宿市教育委員会社会教育課地域学校協働活動推進員に対する聞き取り調査を実施する。
- 3) 上記の結果をふまえ、高齢者や介護に関する家庭科の授業作りを行う。なお、本稿では、紙面の都合により、検討結果による家庭科の授業作りのための視点を記す。

### 3. 結果と考察

#### 1) 鹿児島県における「介護の日」の取組について

##### ①鹿児島県くらし保健福祉部高齢者生き生き推進課への聞き取り調査

鹿児島県では「介護の日」(11月11日)およびその前後の期間に、学校における「介護の日」関連行事として、①仮屋竹洋氏(吉本興業鹿児島県住みます芸人)による認知症に関する講義、②介護職員による介護職の説明会(やりがい、介護ロボットの紹介等)を実施している。令和2年度・3年度はそれぞれ6校で「介護の日」関連イベントを実施している。その目的や成果について、聞き取りを行った。

日時：令和4(2022)年10月21日14:00~16:30

場所：鹿児島県行政庁舎4階

対象：鹿児島県くらし保健福祉部高齢者生き生き推進課 長寿企画係主査 榮浩志氏

聞き取り調査の概要は以下の通り。

##### ○「介護の日」における取組の背景

A. 「介護の日」関連行事としての訪問授業は、コロナ禍の影響によって始まった。厚生労働省が平成20年に「11月11日」を「介護の日」と定めたことに伴い、介護のPR事業の実施が求められた。鹿児島県ではその翌年から、県民交流センターで一般を対象にした講演会やビデオ鑑賞、作文コンクールなどを実施している。しかし、県民交流センターでは一般の方が気軽に足を運ぶのは難しいため、令和元年度から、一般の方でもふらっと立ち寄れる「天文館のベルク広場」で講演会などのイベントを開催するようになった。当時は250人ほどの参加者があっ

たが、令和2年度にコロナが蔓延したため、不特定多数の人が集まる場所でのイベント開催は困難になった。そこで、介護職のイメージアップを図る事業として仮屋氏による訪問授業を実施するようになった。

##### ○訪問授業の具体的な流れ

A. 授業は基本的に吉本興業さんにお任せしていて、授業内容から動画作成まで行っていただいている。最初に仮屋氏が自己紹介をして、認知症について10分程度お話いただく。仮屋氏は認知症サポーター養成講師の資格をお持ちなので、認知症について説明いただいた後、話し合う活動を行う。話し合った内容は、グループごとに発表して、介護職員からのコメントの後、クラス全体で共有する。介護職員から仕事のやりがいや楽しさを聞いたり、介護ロボットを見たりする時間も設けている。

##### ○介護ロボットの紹介

A. 介護施設とZOOMでつながり、ベッドから高齢者を移動させる時に用いるロボットや腰痛防止のパワースーツなどを紹介する。介護職は「きつい」というイメージがあるが、ロボットなどの新しい技術で身体的な負担が軽減されていることを伝えている。授業後のアンケートでも、子どもたちのイメージ改善ができています。

##### ○開催する学校の条件

A. 県内の全学校に「介護の日」関連行事で行う事業を教育委員会を通してメール送信し、希望があった学校に向く。大規模校での開催は難しいが、離島などにも訪問している。昨年、沖永良部島の和泊小学校で訪問授業をした際は、奄美新聞で授業の様子が取り上げられた。学校側の金銭的な負担はなく、テレビやパソコンなどの器具が用意できていれば特別な準備は不要である。

##### ○鹿児島県の高齢者の現状

A. 鹿児島県では令和7年には介護職員が2,200人不足すると言われている。1人の介護職員が5人の高齢者を介護するとすると、1万1,000人の高齢者が施設に入れない。県の人口が約60万人なので、1万人はとても大きい。

##### ○事業における鹿児島県ならではの特色

A. 他県でも、介護職員による学校訪問やPR活動はあるが、芸人さんを起用する取組は珍しい。

仮屋氏は地域の高齢者向け講座を行ったり、高齢者と文通をしたりしていて、認知症に関する知識もお持ちであると県議会議員から紹介があった。

##### ○事業の成果と課題

A. 事業後のアンケートによれば、介護は「きつい」というイメージを持っていた子どもたちの介護のイメージは授業後に変化している。授業を受けた

子どもたちが1人でも「介護職っていいな」と思ってくれば成果である。You Tube で訪問授業の様子を公開しているが、あまり知られていない。この事業は、もともと一般向けの取組であるため、コロナ禍の中、どのように実施するかが課題である。介護職員のお話をオンライン配信するなど考えたが、一般の方が視聴しやすい工夫が必要である。

○介護に親しみを持つために大切にしていること

A. 訪問授業の中で、鹿児島で活躍している若い介護職員とリモートでつながることで、親近感が持てるように工夫している。リモートでつながるケア★スタの方々が介護職の魅力ややりがいなどを子どもたちに明るく楽しく伝えている。

○今後の活動への抱負

A. 介護職を知り、介護職のイメージアップや職業選択の1つとなる事業にしたい。回を重ねるにつれ、先生方が異動先でこの訪問授業のことを広げてくれており、長い目で見て続けていきたい。

②訪問授業を行う仮屋竹洋氏への聞き取り調査

「介護の日」の事業コーディネーターを務める仮屋竹洋氏は鹿児島県肝付町出身、サッカー、日本史、高齢者との文通などを趣味とする35歳（芸歴11年目）。吉本新喜劇東京班を経て、2018年から「鹿児島県住みます芸人」になる。認知症サポーター養成講師を務め、高校（地歴）の教員免許を持つ。多くの方・高齢者に楽しんでもらえるような認知症講演会を開催するなど、地域の高齢者、地域を元気にする活動を行っている。

仮屋氏への聞き取り調査は以下のように実施した。

日時：令和4（2022）年11月2日14：00～15：10  
方法：Zoomによるオンラインでの聞き取り調査  
聞き取り調査の概要は以下の通り。

○「介護の日」関連行事以外の子ども向けの取組

A. 以前から、漫才ワークショップを行っていて、子どもたちと一緒に漫才をつくったり、漫才をしたりしていた。学校で喋るのが苦手だったり、友だちが少ないという子どもたちに漫才をしてもらって、人前に出て話す楽しさを感じたり、友だちを増やしたりする目的で、子どもたちと接するようになった。

○「介護の日」関連行事への思い

A. 始めた当時は認知症には詳しくなかったが、介護については詳しくなく、不安な気持ちが大きかったので、認知症と共に介護の勉強も1から行った。介護は「こうならないように気をつける」という予防的な面が強いが、私の高齢者向け認知症の講演会は「なってもいいじゃん」「なることに対する不安を笑い飛ばそう」というものであったため、反対に思えた。子どもたちとの活動を始めてみて、「予防」も

「笑って不安を取り除く」ことも同じだと気づいた。不安を取り除くことが予防に繋がり、みんなで笑い飛ばしましょうと言っていたら、実は笑いが一番予防になっていることに気づいた。

○授業後、子どもたちに抱いてほしい思い

A. 子どもたちには「ためになった」というより「楽しかった！」という思いを持ってほしい。「なんか楽しかったな～あの授業」という風に子どもたちの心に残る授業がしたい。そうすると、幼い頃の記憶は心に残るものだから、なんとなく「介護ってそんなに難しくないんだ」とか、「介護＝たくさん笑った」と思い出し、介護に対するイメージアップにつながるのではないかと。

○実際の授業内容

A. 授業の最初は笑いを交えながら、認知症のサポーター養成講座を行い、おじいちゃんおばあちゃんに対するイメージを持ってもらうようにする。その後、ワークショップではグループワークを行う。「介護施設でおじいちゃんおばあちゃんがこんなことを言いました」や「町のスーパーの前でこんな困りごとを言っているおじいちゃんおばあちゃんがありました」などの場面設定を題材として、「みんなだったらどのように対応する？」という話し合いを行う。まず10分程度個人で考えてからグループ内で共有して、その後、グループごとに発表する。

○グループ発表後、介護職員に話してもらうこと

A. 私も介護職員も思っている「こたえ」なんてなくて、子どもたちの発表・意見に「あ、それいい案だね」とか「これ、こうしたらいいかもね」と応えている。先生と子どもたちというより一同僚のような関係で話している。介護職員は、実際介護職に就くとこんな福利厚生があるんだよ、こんなところにやりがいを感じるよ、という話もする。

○グループワークの目的

A. おじいちゃんおばあちゃんに丁寧な対応をしよう、とか、おじいちゃんおばあちゃんにこうしたらいいんじゃないかって、自分で考えて意見を出し合うことより、「自分がおじいちゃんおばあちゃんになってみて、気持ちを味わってみよう」ということが一番の目的。自分だったらどのようにされたら嬉しい？安心する？ということを考えてほしい。

ご飯を食べたあと「さっき食べたじゃん」と言われたら、自分のご飯を食べていない気持なのにどう感じる？というように、高齢者も私たちと同じようにたくさんの感情を持っていることを考えてもらう。そしたら、自分のことのように、困っている高齢者の方に接することができるのでは。そのために具体的な場面で高齢者になりきって考えてもらう。

### ○授業におけるお笑いの要素の組み込み方

A. 例えば、認知症の高齢者と私たちを比べると、どのくらい記憶力に差があるのか？という話をして、実はほぼ同じなんだよ、どちらも日常の身の回りに起こったことを1%しか覚えていない。じゃあどこが違うのかというと、トイレに行くとか、お風呂に行くとか、歯磨きするという大事なことを覚えているかどうかの違いなんだよ。そこで反応した子どもに対して、朝起きてからのことをどれくらい覚えているか質問して、子どもとのやり取りの中でボケていくという感じ。最初の講話では、「お笑いとしてボケることは笑えるのだから、認知症の方がボケてもいいじゃないか。ボケてなんか面白いこと言うようになったねって、周りの私たちが笑って接することができるようになると、高齢者も安心してボケることができるよね」ということも話している。

子どもたちが発言して私がツッコんだ方が笑いやすい。他の子たちも、子どもとのやり取りの中での笑いの方が笑いやすい。子どもたちが話しやすい、楽しいと思えるような授業の雰囲気作りを一番大切にしている。

### ○実際の授業で子どもたちの様子で気づいたこと

A. 最初、ワークショップが始まる時は「どこから考えたらいんだろう」というところからスタートしている。そういう時は、「おじいちゃんおばあちゃんがこう返して来たらどうする？」と、状況を絞り込んで考えてもらう。ワークショップ中はみんな笑っている。話し合いのあとは「うちの班が一番よかったよね！思いやりをもってたよね！」という感じで話している。授業後は、どの学校でも私のところに寄って来てくれて「じゃあこの時は？こんな時は？」と話してくれるのでとても楽しい。

### ○介護職員と子どもたちとのやり取りの成果

A. ワークショップとかで、子どもたちが考えて「僕だったら、私だったらこうする！」というのが、大人になってからじゃ出てこないアイデアが出てくる。「あ！その手があったか！」「なるほど」と感じたと話している。例えば「家に帰りたいてって言ったおじいちゃんにみんなだったらどう接する？そのおじいちゃん、施設から出せないんだよね。危ないから。施設内でおじいちゃんが笑ってられるようにしてあげたい」というお題に対し、介護職員は「気を紛らわせる」とか「好きな食べ物、趣味などを用意する」などで対応すると答える。一方、子どもたちは「じゃあ僕、VRをおうちで撮ってきて、それを施設内で見れるようにするよ！」という、職員も驚くアイデアが出る。実際に子どもたちから出たアイデアを取り入れる施設等もある。

### ○授業実践で難しいと感じることや課題

A. 授業をする時、子どもたち全員に同じような気持ちになってもらうのは難しい。みんな十人十色性格が違うので。同じグループ内でも、子どもたちの取組方に違いがある。意欲を持ってお題について考えている子もいれば、手遊びをしている子どももいる。そういう最初から介護に対して興味を持ってない子どもたちに、どうやったら笑いの力で引き込んでいくか、伝えていくかが課題である。お笑いはずごい力を持っていると思う。「介護」はボケる認知症の方がいて、その方をサポートする介護職員がいる。「お笑い」もボケる人がいて、それにツッコむ人がいる。「お笑い」はボケとツッコミがうまくいとお客さんたちが笑ってくれる。「介護」もそれと同じじゃないかと思う。認知症の方がボケて、それに対応するサポートや介護がうまくいくと、家族や周りの人たち、ボケとサポートする人たちみんなが笑顔になったり安心したりする。子どもたちにこのことをどのようにおもしろく、わかりやすく伝えていけるか、考えていきたい。

私の掲げているモットーが「ボケても大丈夫、誰もひとりぼっちにしない」というものなので、本当に子どもたちを誰もひとりぼっちにしないように、お笑いパワーでやっていくのが今後の課題だと思う。

### ○訪問授業での工夫や大切にしていること

A. おじいちゃんおばあちゃんの気持ちになって考えてほしいので、なってほしいとは言わず、自然とおじいちゃんおばあちゃんの気持ちに子どもたちがなれるようにし、授業の最後に、実はおじいちゃんおばあちゃんの気持ちになってほしかったということを伝えている。そのために、最初に、認知症講座の時間があって、脳について少し話をする。おじいちゃんおばあちゃんになっても感情を司っている部分は傷つかない。辛いことも楽しいことも感じるし、きちんと覚えている。おじいちゃんおばあちゃんも私たちと同じように感じているということを伝えて、笑顔で楽しく話すことの大切さに気づかせる。

また「友だちだったらどうする？」と聞いて、友だちが道に迷っていたり、困っていたらどうする？という感じで、子どもたちが想像しやすい身近な存在に置き換えると、子どもたちも考えやすくなる。

あとは、ワークショップの時、グループ内でおじいちゃん役などをやってみて、「どうだった？今こう言われて」と聞くと、「もうちょっと優しく言って欲しい」とか「私だったらあんまり嬉しくないかも」となる。子どもたちが極力自分たちだけでおじいちゃんおばあちゃんの気持ちになって、それに対して思いやりをもってどれだけ接することができる

かを大切にしている。

○「介護」に親しみをもつために大切なこと

A. ハードルを下げてあげることだと思う。今の子どもたちは、いろいろな媒体でいろんな情報を得ているので、介護が大変な仕事ってみんな知っているし、親御さんからキツイよと聴いて、そういうイメージになっている子どもも多い。その上で、これから自分が選択するかもしれないお仕事として、楽しさ、やってよかったと思うことなどを具体的に知ってもらう。仕事はどれも大変で、介護もそうだけど、他の仕事にはない楽しさや喜び、感動があるということを実際に働いている介護職員からいろいろなエピソードを交えて教えていただく。

○介護にマイナスなイメージを持つ保護者対応

A. 私が授業をやって、子どもたちが「楽しかった！介護職いいかもな」という気持ちになって家に帰っても、親御さんが「介護は大変だよ」ということはあると思う。そのやり取りがあるのはいいと思う。その子自身が実際に就職活動をする時「そういえば介護の授業おもしろかったな」と思い出して一つの選択肢になってくれたらいいと思っている。

○今後の活動への抱負

A. 鹿児島43市町村で高齢者向け講演会を行うこととパン屋を開くこと。パン屋は過疎が進んでいる地域で、免許を返納した高齢者に必要なものを買ったりするなんでも屋兼パン屋を開く予定。そういうパン屋を鹿児島のいたるところに広めたい。その利益をもとに、吉本興業の他の芸人さんや俳優さん、ミュージシャンなどを鹿児島に呼んで、公民館など身近なところでいろんなイベントを開きたい。以前、講演会で、ある高齢者の方に「若い方に私たちの味方がいると思ってなかった」という話を聞いた。だからこそ、高齢者の前で子どもたちが漫才を披露して高齢者は笑いと元気をもらい、子どもたちは高齢者から経験をもらうという場を作りたい。

○子どもたちと高齢者をつなぐ活動

A. 漫才ワークショップを広めたい。出身地の肝付町と鹿児島市内のいくつかの地域でしか開催できてないので、県内のいろんな所で開催して、高齢者と地元の子どもたちをつなげる活動を広めたい。

## 2)「かごしま地域学校協働活動」に関する調査

ここでは「社会に開かれた教育課程」を実現するため、地域と協働する活動を展開する「かごしま地域学校協働活動」に関する聞き取り結果を述べる。

①鹿児島県教育庁社会教育課への聞き取り調査

日時：令和4(2022)年10月24日11:00~12:30

対象：鹿児島県教育庁社会教育課生涯学習係社会

教育主事兼専門員 本山智彦氏・谷山直矢氏

○活動目的、背景等

A. 国の流れを受けて、鹿児島県では「かごしま未来創造ビジョン」という誰もが安心して暮らし、活躍できる鹿児島を作っていこうという県全体の計画を作っている。それを受けて、教育委員会では「鹿児島県教育大綱」がある。地域学校協働活動は、施策の方針の「地域全体で子どもを守り育てる環境づくりの推進」にあたる。

○地域学校協働活動の鹿児島ならではの特色

A. 鹿児島県教育大綱「地域全体で子どもを守り育てる環境づくりの推進」という教育施策の方針にもあったとおり、本県には「人の子も我が子も地域の子」という言葉があり、子どもを地域で育てるといふ風土がある。地域によって差があるのも鹿児島県の特徴。人口が減っている過疎地域や高齢化が進む地域、離島などもある。必ずしも組織にこだわらなくてよい。これを作らないといけないというゴールではなくて、こういう子どもたちに育てて欲しいという目標に向かって、こういう組織があったらいいですよという提案をする。目的と手段が逆転すると形骸化する。鹿児島は地域差があるからこそ、組織に拘るのではなく、地域の実状に即し、こういう方法もありますよと地域と一緒に考える。まず目的を見据えてもらうのが大事。

○鹿児島県として重きを置いていること

A. 従来の学校支援にならないようにしている。学校側が一方的に進めれば、従来の学校支援にしかならず、学校側にしかメリットがないやり方になってしまい、地域から見て学校は都合のよい時だけ私たちを使って、となってしまう。使う使われるのではなく、一緒に問題を解決しようというどちらにもメリットを感じてもらえるような活動にしていきたい。地域の方にとって、自分の特性や特徴を活かした生きがいつくりの場になることも期待される。高齢者のライフステージの中で、自分はここに住んでいいんだという心の拠り所になってほしい。

○活動内容、実態

A. 義務教育学校を中心に活動している。高校に視点を移せば、キャリア教育という面から、地域と企業が結びついて実際の商品を作ることもあるので、実際に農家などに出向いて作物を育てるところから商品開発を行うなどおもしろい活動もある。生徒と地域の方が共同経営者として横のつながりの中で新しいものを生み出し、高齢者だけでは思いつかなかった方法や商品を若い力で作り出すことで、新たな雇用の場を生み出す可能性もある。

○県は自治体等にどのように関わっているのか

A. 県としては、地域学校協働活動に関する市町村向け研修会を開いている。地域と学校をつなぐ推進員、コーディネーターにスキルアップの研修会を行い、地域課題と学校の課題を結び付け、適材適所のマッチングが期待できる。また、啓発活動と市町村における活動の好事例を発信して、「こんな活動もできる」ということを知ってもらう。指導するというより、市町村の相談相手になっている。

県として課題を全て把握するのは難しい。各市町村が実際に活動を進めてみて、困り感などを県に相談している。普段から市町村が県と壁を感じないように相談しやすい関係を築き、上下ではなく横の関係として寄り添っていけるよう心がけている。

国ではコミュニティスクールが導入され、地域と学校とが同じ目的を持って子どもを育てるという目的のもと、それぞれができることを責任を持って取組む仕組みができています。県はコミュニティスクール導入に直接関与せず、各市町村教育委員会などが決めていく。コミュニティスクールは強制ではないので、地域の実情に沿って導入していく必要がある。地域と学校がうまく連携できていて導入する必要がなく、子どもたちのあるべき姿を共有しているのであれば、組織にこだわる必要はない。いろんなアプローチの仕方があってよい。

学校からのアプローチに関しては、それまで「学校応援団事業」に取り組んでいたのが、授業で必要な人材が欲しい場合は、コーディネーターがマッチングして地域の方を派遣する。地域からのアプローチは、地域が行う活動に子どもたちが出ていくというもので、地域の行事、お祭りなどを学校の年間計画とすり合わせて、学校行事や地域の行事にみんなが参加する。お互い共通理解をして共通の目標を持たなければ、地域学校協働活動にならない。

○県内各地への普及、地域課題の学校との共有

A. まだ全ての地域で同じレベルで浸透していない。今年度まで、事業計画として広報・啓発を強化する期間としていたので、全部の地域の実情を把握しているわけではないが、不十分なところはある。地域の課題を学校が把握できているのかに関しては、知る、共有するという場が重要になる。地域にはどのようなものがあるのか、どのような人が住んでいるのかを横レベルで地域と学校が共に知っていく必要がある。地域の課題は、そこに住んでいる人にしか分からないことはある。学校の課題もそうで、お互いマイナスなイメージに思えることでも共有し、知っていくことが大事。対話する場面をどのように作っていくか、手を結ぶところのあり方が大事になる。コミュニティスクールが導入されていると、

制度上、その話し合いはできているが、形骸化している可能性もある。会を開くことが目的になっている場合もあるので、地域による温度差はあると思う。

○コミュニティスクールと学校と地域の関係

A. 学校運営協議会を設置していないところは、学校評議員制度があり、その会議で話し合う。地域側には地域学校協働本部というものがあるので、そこで協議を行う。コミュニティスクールがなくても、もともと学校、地域には青少年健全育成連絡協議会などがある。それらの組織を活用しながら共通の目標を見つけようとしている。目標、目的をお互いに話し合い、共有する場があればよい。話すことが目的であって場所を作ることが目的ではない。組織があれば中の人が変わっても、継続していく。

○県内の学校の実状

A. 県内のほぼ全部の学校で取り組んでいる。令和3年度は95.8%の学校が実施している。ただ、学校に対する支援活動は100%なのに対して、もともと学校支援を核とした取組はだいぶ進んでいるが、これからの課題としては「放課後等における学習・体験活動（放課後こども教室）」「土曜日等における教育支援活動（ふるさと学生寮）」「家庭教育支援」「学びによるまちづくり、地域課題解決型学習」で、まだ達成されていない。地域防災訓練については、学校だけで行うか、地域で一緒に行うかで、地域と一緒に訓練しているところを紹介している。牛尾校区は、子どもたちの見守りを安全見守り隊を作ってやっている。朝学校に行く時、保護者の送り迎えが多かったのが、地域の方と歩いていくようになって、地域の方々は健康づくりと生きがいつくりにつながり、子どもたちも地域の方々と話しながら安全に学校まで行くという関係性ができあがっている。学校に対する支援活動は、先ほど100%と話したが、活動する中で地域の方が子どもと接したり、自分も役に立つんだと思ったりすることが、生きがいつくりに通じている。地域の課題が高齢者の生きがいつくりなどであったら、それは達成されている。学校によっては、活動で関わった地域の方を交流給食や別のところでふれ合う場を計画しているので、その授業、その時間だけで終わらないようにすることが大事。学校支援で顔と顔を突き合わせて、お互いのことをまず知ること、挨拶などの関わりが生まれる。それが広がると、隣に住んでいる人のことがわかる。周りに知らない人がいなくなると、その地域はきっと安心安全な街になる。何かあった時は、お互い助け合っていく可能性が生まれる。

○「地元、鹿児島」に親しみを持つための取組

A. 子どもが育つ姿は地域のあり方でもある。例

えば、「挨拶ができる子どもを育てたい」という目標であれば、挨拶がいっぱいできる、人と人がつながり合っている地域でありたいということ。地域学校協働活動は、子どもだけのことではない、最終到達点は地域づくりであるという認識を持つ必要がある。そういう意識の下で育った子どもたちが、地域に戻ってきて同じ目的を持って、自分の子どもや孫、地域の子どもたちに接していく。そこには地域に対する同じ思いや感覚を持っている人が集まる。このような活動が盛んに行われている地域で育った子どもは、ふるさとに親しみを持つのではないかと思う。高齢化は進んでいくが、地域から子どもたちがいなくなることは防げるかもしれない。

#### ○今後の活動への抱負

A. 次世代を担う子どもたちのため、多くの地域住民や多様な団体等が連携・協働した「地域学校協働活動」を県全域で広報、啓発に努めたい。

#### ②「いぶすき地域学校協働活動」の聞き取り調査

日時：令和4(2022)年12月8日14:00～15:10

場所：Zoomによるオンラインでの聞き取り調査

対象：指宿市教育委員会社会教育課 地域学校協働活動推進委員 下拂満氏

聞き取り調査の概要は以下の通り。

#### ○いぶすき「地域学校協働活動」の体制

A. 指宿市では、学校運営協議会と学校応援団協議会という2つの組織が一体的に推進している。学校応援団協議会は指宿独自のもので、地域コーディネーターが運営しているため、実行性が高い。学校運営協議会だと、PTA、民生委員など各所属団体に持ち帰って、理事会や役員会など所属団体に話し合わないといけないのですぐに実行できない。学校運営協議会と目的は同じだが、地域コーディネーターの負担軽減や、地域住民と直接話し合いの場が設けられるよう設置している。

#### ○地域学校協働活動推進員とは

A. 各校区に地域コーディネーターがいる。小学校校区に1人、中学校校区に1人。この地域コーディネーターは推進員の役割も担っている。私は、全ての校区を統括して、全体のいろいろな課題や困りごとを支援、助言する立場。指宿市内には私のような推進員は1人。各校区にはコーディネーターがいる。

#### ○学校教員は地域コーディネーターになるのか

A. ならないと思う。金銭的な余裕があれば推進員になってほしいが、今のところ校区公民館の主事が担っている。各校区には校区公民館があり、その主事は地域の生涯学習に関する講座の募集・支援をしている。地域学校協働活動を進めるにあたり、本

来なら別の人をコーディネーターとして配置することが望ましいが人材が見つからない。小学校区は校区公民館主事、中学校区は地域の有志に地域コーディネーターの活動をお願いしている。

○地域コーディネーターと学校をスムーズに結ぶため、家庭科教師などの地域と密着している教員が地域コーディネーターとタッグを組み、懸け橋の役割を担うことは実現可能か

A. 可能だし、ぜひお願いしたい。学校と地域コーディネーターと連携する方、校務分掌で地域学校協働活動の担当者は教頭先生が中心。私たちとしては教頭先生をお願いしたいのではなく、教員に地域コーディネーターと学校をつなぐ、連絡を取り合っていく先生を決めていただきたい。その方が学校応援団活動を進めてほしいと提案したいが、社会教育課と学校教育課という垣根があり、うまく連携が取れていない。教頭先生ではない先生に担当してほしいと思う理由は、教科を教えている先生だと周りの先生や同僚に相談する。教頭先生よりも、同じ学年や同世代の先生方が地域と繋がることで、周りの先生にも地域学校協働活動への協力体制が広がると思う。

#### ○地域の課題を学校と共に解決しようという取組

A. 現在「ふるさとを自慢できる子どもの育成」を指宿市の課題、地域の課題として掲げている。指宿市は一体的に地域学校協働活動を進めるために、各課や学校、地域、各種団体等で取り組んでいる。指宿市の課題に基づき、校区ごとに地域と学校が共通の目標を設定している。私たち社会教育課は、地域学校協働活動を推進している。学校教育課では、小中連携による「いぶすき『ふるさと学』」を推進している。PTAや子ども会にも「ふるさとを自慢できるような子どもの育成」に繋がるような体験活動などを依頼している。

#### ○学校教育課における小中連携の取組み

A. 学校教育課は小中学校が連携する「いぶすき『ふるさと学』」を行っている。開聞校区では、小学校5、6年生と中学校1年生が関わって、地域の方と一緒に郷土芸能を練習して発表している。開聞中学校では、開聞岳に登って、その山を紹介するパンフレットを作成する授業を行っており、小中学校9年間のカリキュラムに位置づけている。南指宿中学校区では、小中学校が指宿の観光、歴史、温泉、農業、水産業などグループに分かれて調べ物をしている。中学生が小学校に出向いて小学生の発表を聴き、小学生は中学生の文化祭に参加して発表を聴くという連携を図っている。中学校区の小中学校の先生方が、「いぶすき『ふるさと学』」としてどのような活動をしていくかを集まって話し合っている。

○体験活動以外に主体性を持って学ぶ取組

A. とても大事な部分. これからの社会は AI などによって、人間でないといけないうところ人間でなくてもいいところが出てくる。今ある職業は子どもたちが大人になった時にはないかもしれない、新たな課題に果敢に挑戦する子どもたちを育てていく必要があるからこそ、社会に開かれた教育課程が必要になる。主体性を持って、新たな課題を解決していく力を身に付ける場としては学校だけでは十分ではない。地域の中でこそ、新たな課題に挑戦する子どもたちの姿が見えてくるのではないか。子どもたちは、地域の方の役に立ったという喜び、自分にもできたという達成感、自分の得意なことが役立ったという経験をする中で、地域への愛着も湧くし自己肯定感も高まる。そうした小さい頃からの経験が、社会に出た時、新しいこと未知のことに果敢に挑戦していく力を育てていくと思う。「ありがとう、あなたがいたから地域の人たちは助かっているんだよ」と言われる場合は、学校の中だけでは難しい。先生方もその大切さを知ってもらい、たくさんそのような時間を作ってほしい。

○放課後子ども教室以外の学校応援団活動

A. 放課後子ども教室以外なら家庭科でミシンの補助や調理の補助がどこの校区でもある。総合的な学習の時間や生活の時間を使って農業体験したり、昔遊びをしたり、地域の方が学校を支援するような活動は以前から取り組んでいる。地域が学校に依頼して子どもたちが地域に出て行く活動は少ない。

放課後子ども教室では、柳田小学校では放課後に近くの高校生が小学生の宿題を見たり、校庭で一緒に遊んだりしている。小学校の近く、道路を挟んだ向かい側に高校があるところがある。そこで放課後子ども教室などの活動ができないか、学校応援団協議会が話し合っている。

○活動を推進するにあたって得られたことや成果

A. 古い習慣の良さを引き継ぎ、若い力を活かす場を作りながら、新しい風を吹き込んでいる。

○活動を推進するにあたっての困難な点や課題点

A. 指宿市では、農業、観光、自営業などが多く、高齢者も現役で働いている方が多いので、ボランティアの人材不足がある。学校職員の地域学校協働活動に対する理解が不足していること、地域学校協働活動のねらいが最終的には地域づくりにあることが理解されていないこと、地域の方々の生きがいづくり、地域を支える人材育成などがねらいであることへの理解が不十分のため、協力体制や多様な活動へ広がっていない。ボランティア不足の対応策としては、地域学校協働活動が最終的には地域づくり、地域のた

めにあることを声を大にして言う必要がある。これから地域を担っていく人材育成、子どもたちのためというのがあるが、地域の高齢者で生きがいを見つけられなかったり、趣味がないという地域の方がいらっしゃるのでは、子どもたちとのふれあいを通して、自分の持ち味を活かしたり、楽しみになってくれると嬉しい。高齢者の中には、自分は何も教えられないことはないと思っている方がいる。そうではなく、子どもから教えてもらう、「これはどうやったらできるの?」「今日はどんなことを勉強したの?」などを聞いて一緒に学んでいくのもとても大事。地域学校協働活動に参加するための敷居を下げ、多くの方に参加してもらいようにしていきたい。スマホでもタブレットでもパソコンでも、高齢者より子どもの方が詳しくするので、子どもたちが地域の方に教えるような活動も増やしたい。

地域学校協働活動における指宿市の学校教員の協力体制は課題であると考えている。市内の学校の校内研修で回っているが、学校の先生方はほとんど地域学校協働活動を知らない。管理職が知っている程度。先生方も40人中2人くらい知っているかいないかという状況。なので「地域と一緒に子どもたちを育てていきましょう」と先生方に訴えていかななくてはいけない。先ほど紹介した開聞中、今泉小などでは、先生方と地域の方、ボランティアが信頼関係で結ばれている。いろんな活動がスムーズに動いていて、さらに発展した活動が生まれそうである。

地域学校協働活動を教育課程に位置づけるには、地域で子どもたちが行っていく活動の有効性を一般の教員、転勤がある先生がどれだけ理解しているかが重要になる。教育課程に地域の課題が入っていくには教員がその必要性を感じていない、忙しすぎてそれどころではない状態である。例えば、地域の課題として伝統芸能の後継者不足、農家の後継者不足などがあり、地域から教育活動の中に取り入れて下さいとお願いした時に、校長先生が許可しても、他の教職員が、今、別の計画があるので、そういう活動の時間は確保できないとなれば、先に進めない。どうしても時数は限られているので、先生方が大事だな、必要だなと思ってくれないと地域学校協働活動は広まっていけない。学校運営協議会において、地域と学校で子どもたちの目指す姿を教員もみんなでも共有していれば実現できる。地域だけが大事だと思っていて、学校側が必要と思っていなければ、教育課程に反映されない。

○今後の活動への抱負

A. 学校も地域も「やってよかった」「活動してよかった」と感じてもらわないと広がっていかない。



地域ボランティアも、子どもと触れ合うだけでもよいので参加してほしい。「ここで生きていく子どもたちを育てていくためには、地域と協力していくことが大切」ということを教員に研修会等で広めていく必要がある。学校にとっても、地域にとってもWinWinの関係になる活動をめざしたい。

### 3) 小中学校との連携や家庭科の授業への活用, 家庭科教師の役割について

「介護の日」関連行事, 「かごしま地域学校協働活動」に関する聞き取り調査をもとに, 小中学校の連携, 家庭科の授業への活用, 家庭科教師の役割について考察する。

①「介護の日」関連行事として, お笑い芸人が行っている介護の訪問授業については, 「介護」という児童生徒が興味を持ちにくい分野を「お笑い芸人」が授業を行うことで, 授業に対する興味関心が高まるだけでなく, 高齢者や介護に対するイメージが変化し, 笑いあふれる授業になっていた。家庭科の授業においても, ゲストティーチャーを工夫することで, 児童生徒の関心を高め, 相乗効果が期待できる。

②訪問授業で実施されていたワークショップの課題は, 具体的な場面を設定し, グループで考えることで, 児童生徒は高齢者との関わり方について考えやすくなるが, 学校種や児童の実態に合わせて設定する必要がある。

③訪問授業における認知症サポーター養成講座の内容は, 高齢者の特徴を穴埋めで考えたり, 認知症の仕組みを「きおくのつぼ」に例えて考えたり, 高齢者や認知症に関する知識を最初に扱ったりしていた。高齢者や認知症に関するわかりやすい説明は, 学校教員からも勉強になったという声が多く, 児童だけでなく教員の学びにもつながる内容である。授業冒頭で高齢者の特徴に触れる際は, 高齢者の特徴や気持ちを理解するために, 高齢者疑似体験や車いすの体験活動を取り入れることも有効である。

④訪問授業における介護ロボットの内容は, 介護職員がリモートで, 介護ロボットを実際に使用している様子を見せたり, 質問等に答えるという場面が設けられていた。授業後のアンケートを見ると, 介護ロボットを知ることによって, 介護に対する「大変だ」「きつい」などのイメージが変化したと書いた児童生徒が多かった。介護に関する授業で介護ロボットの動画を観たり, 高齢者施設を見学に行く際, 実際に使用しているところを見たりする活動を取り入れることが考えられる。

⑤よしもと住みます芸人は, 実際にその地域に住みながら, 地方を笑いで元気にする取組を行って

る。教材やゲストティーチャーとして活用したい。

⑥かごしま地域学校協働活動の「いぶすき『ふるさと学』」では, 小中学校が連携する取組が行われている。中学生が小学校を訪問して指宿の観光, 歴史など調べたことをお互いに発表するという活動があった。家庭科でも, 小学生と中学生と一緒に地域の課題について解決策やできることを考え, 中学生だからできること, 中学生になったら実践したいことなどを, それぞれの立場で見通しを持って考え, 実践につなげる学習も考えられる。

⑦地域の課題に取り組む活動については, 登下校の見守り活動など, 学校に対して地域が支援する活動は, 多くの校区で以前から実践されてきた。しかし, 地域に対して学校が協働していく活動はまだ実践が少なく, 活動の種類も限られている。そこで, 家庭科において, 児童生徒がそこに住む地域の方に直接インタビューするなどして, 具体的な解決策や今の自分にできることを考える活動ができるのではないかと考える。地域の方との交流は, 一度だけではなく継続的に行っていくことで, 地域に住む一員としての自覚につながる。他教科や地域に関する学校行事などとの関連を考えていきたい。

⑧地域コーディネーターと学校をつなぐ役割を担う教員については, 学校教員が地域学校協働活動への理解と協力が不十分であることが, 地域学校協働活動を進める上で課題であるとわかった。現在, 地域コーディネーターは, 各学校の教頭と連絡を取り合っており, 地域コーディネーターと学校との架け橋の役割を家庭科教師が担うことで, さらに活動の発展が期待できる。地域学校協働活動に対する教員の理解を深めるためにも, 管理職よりも教科を指導している教師が地域コーディネーターと密に関係を築くことで, 地域と教員一人一人の距離を縮められると考える。とくに, 家庭科の教員は, 地域と学校をつなぐ役割を担いやすいと考える。現在も学校支援活動として, ミシンの補助指導, 調理実習の調理補助などで地域のボランティアが活用されており, より地域に開かれた教科といえる。家庭科の教員が地域コーディネーターとつながり, 地域の特徴, 実状を把握して, 他教科の先生と情報共有や相談を行っていくことで, 地域と学校が共有する子ども像の実現につながる。さらに, 家庭科教師同士も校区を越えて横でつながることで, 様々な取組に発展していく。家庭科教師自身が, 地域住民の一員という自覚を持ち, 地域のことについて知り, 地域とつながろうという意思を持つことは大切である。

なお, このような考察結果を生かし, 中学校技術・家庭科(家庭分野)の授業プランを開発したが, 紙

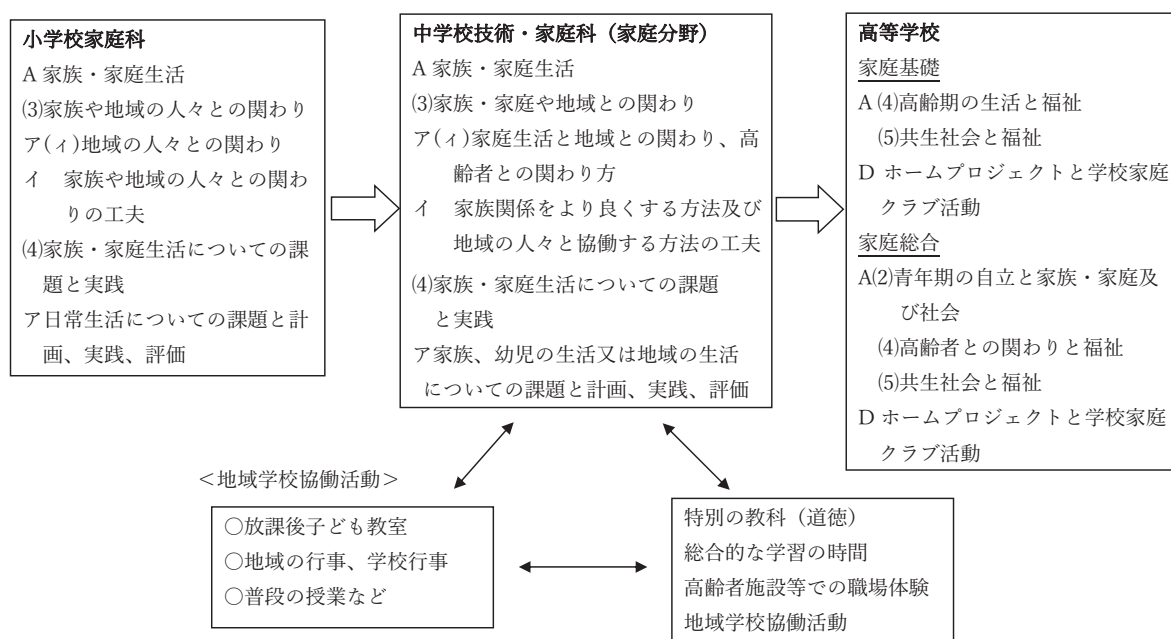


図1 家庭科の学習過程と「地域学校協働活動」、他教科等の学習との関連づけ

面の都合で割愛する。この授業プランでは、小学校・中学校・高等学校における家庭科の系統性に加えて、他教科や地域学校協働活動を関連づけることを構想した(図1)。このような展望が描けることも家庭科という教科の特性であると考えられる。

や高齢者の方との関わり方を考えられる授業を構想した。授業を通して、生徒には、自分が地域の一人であることを自覚し、積極的に地域や地域の高齢者と関わり、地域をよりよくしようと意識を持てるようになってほしいと願う。なお、授業の有効性の検証については、今後の研究課題としたい。

#### 4. まとめ

高齢化を背景に、中学校家庭科では高齢者に関する学習内容が重視されている。本稿では、鹿児島県で実施されている「介護の日」関連行事、「かごしま地域学校協働活動」に着目し、「介護の日」関連行事で訪問授業を行っている仮屋竹洋氏、「かごしま地域学校協働活動」に関する鹿児島県と指宿市への聞き取り調査等を通して、これからの地域や学校における「介護」の取り上げ方について検討した。

おもな結果は以下の通り。

①「介護」について「お笑い芸人」が授業を行うことで、高齢者や介護に対するイメージが変化する。家庭科の授業でも、ゲストティーチャーとして活用することで、笑いあふれる授業が期待される。

②地域と学校をつなぐ地域コーディネーターの役割を家庭科教師が担うことで、学校と地域の問題を共有し、家庭科の授業の充実にもつながることが期待される。家庭科教師が地域の特徴、実状を把握して、他教科の教員や家庭科教員同士の横のつながりなど、多様なつながりの広がり期待したい。

本研究を通して、家庭科での授業づくりに活かせる視点として、地域人材やお笑い芸人などゲストティーチャーを工夫し、生徒が意欲的に楽しく、地域の方

#### 謝辞

本研究にあたり、資料の提供ならびに聞き取り調査にご協力いただきました鹿児島県くらし保健福祉部高齢者生き生き推進課ならびに同課榮浩志様、吉本興業株式会社 鹿児島県住みます芸人 仮屋竹洋様、鹿児島県教育庁社会教育課ならびに同課生涯学習係 社会教育主事兼専門員 本山智彦様、同 谷山直矢様、指宿市教育委員会社会教育課の皆さまならびに同課地域学校協働活動推進委員 下拂満様に深く感謝いたします。

#### おもな参考文献・ホームページ

- 1) 鹿児島県教育委員会ホームページ : [https://www.pref.kagoshima.jp/ba07/documents/80165\\_20200311080938-1.pdf](https://www.pref.kagoshima.jp/ba07/documents/80165_20200311080938-1.pdf)
- 2) 鹿児島県ホームページ : [https://www.pref.kagoshima.jp/ae04/kenko-fukushi/syogai-syakai/syakaifukushi/documents/35008\\_20220930093532-1.pdf](https://www.pref.kagoshima.jp/ae04/kenko-fukushi/syogai-syakai/syakaifukushi/documents/35008_20220930093532-1.pdf)
- 3) 「鹿児島すこやか長寿プラン2021」 : [https://www.pref.kagoshima.jp/ab13/koureisayahokenfukusi\\_plan2021.html](https://www.pref.kagoshima.jp/ab13/koureisayahokenfukusi_plan2021.html)
- 4) 内閣府(2022)『令和4年版高齢社会白書』サンワ, p.4